

観光学研修「国立公園とディズニーリゾート in the USA」報告

泉 正史*

キーワード：スミソニアン協会 (Smithsonian Institution), 博物館 (Museum),
ミッション (Mission), ビジョン (Vision)

1. はじめに

観光学部では2011年から毎年、春学期のセッション選択科目として、観光学研修「国立公園とディズニーリゾート in the U.S.A.」を開講、2012年は9月3日（月）から15日（土）までの11泊13日間、24名（男性8名、女性16名）の観光学部学生が参加した。

研修の主な目的地は、米国中西部ワイオミング州にある世界初の国立公園「イエローストーン国立公園」、首都ワシントン DC 都心の公園、モール地区に散在する「スミソニアン博物館群」と、フロリダ州オーランドにある、世界最大のテーマパークリゾート「ウォルトディズニーワールドリゾート」の3箇所である。

この3か所は、米国内でそれぞれ離れて位置し（図1）、日本と米国の各目的地間を移動する際、ハブ・アンド・スポークシステムに基く航空ネットワークを利用するため、13日間で延べ9回飛行機を乗り継ぐ必要があった。移動時間の長さ、乗り換えの多さもさることながら、訪問地間の気温の差、同じ国内でも時差があるなど、参加者それぞれ体調管理は大変であったが、幸い病気やけが、大きなトラブルも無く研修を終了する事が出来た。

2. 研修の目的と流れ

1) 米国で研修を行う意義

ツーリズムは多様な側面を持ち、関連する分野が極めて幅広い。そうしたさまざまな関連事象を現実 に即して体系的に捉え、その本質を理解しつつ、実社会での観光発展や観光学の研究深化に繋げるためには、日本国内、あるいは大学内の学習だけでなく、実際の現場、とくに世界のフィールドにおける生の直接体験が極めて重要である。

この研修プログラムでは、米国における自然資源や人文資源を活用した、ツーリズム活動の代表的拠点を訪れ、こうした活動を支える人、組織、制度やその運営実態を学ぶ。

中でも、各訪問先の自然資源や人間の作り上げた有形、無形の資産がどのような形で訪問者を惹きつける魅力あるものとなり、ツーリズム活動に結び付けられているか、参加学生が米国での取り組みの優れた点を自分の目で確かめて学ぶこと、さらに楽しむ側ではなく、楽しませ

* 東海大学観光学部観光学科

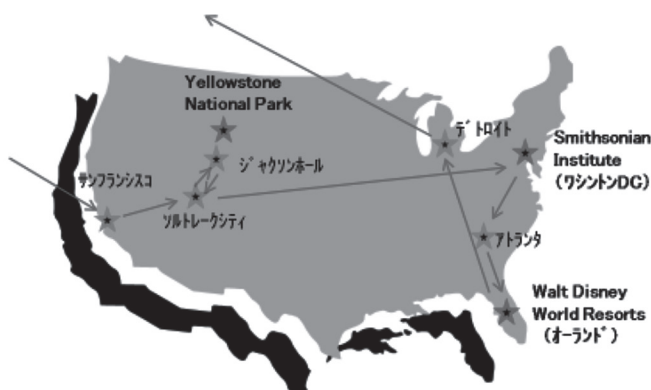


図1 米国の研修訪問先と行程

る側からの視点で、活動の持続的発展のために必要な方策、問題点などについて自ら考えるようになることを研修の目標として重視している。

また、米国の訪問先では、関係者だけでなく、そこで出会う人々と、さまざまな交流の機会がある。そうした機会を通じて、参加学生が将来、世界のいろいろな分野で活躍するために、事実上世界共通のコミュニケーション手段である英語を、道具として使いこなす必要性を認識し、学習に取り組むこと、また異文化を尊重し、理解する心を養うことも目的としている。

2) 研修の流れ

そのため、参加学生が現地で円滑に研修活動できるよう、4月から出発まで春学期間に事前研修を計5回行った。海外研修にあたっての一般的注意事項、諸手続き連絡のほか、訪問先3箇所毎に、主にその英文ホームページ資料を題材に訪問先の概要をとりまとめる課題を課し、それぞれの訪問先、米国社会理解のための基礎的事項や、研修時の注意事項を概説して周知を図った。また訪問先では、運営者のレクチャーを受けて英語で質疑応答を行う機会があるので、英語力向上を目指す自主的学習に努めることを求め、研修の最終評価は、事前、および米国研修時の積極的参加度や理解度、責任ある自主的行動の状況、研修後のレポートの内容、および出発までのTOEICスコアの向上度等を総合的に考慮した。

最初の研修先、イエローストーン公園の初日は公園内の主要スポットを巡検して公園の現状を体験、第2日は管理事務所で広報担当のレンジャーから、設立経緯、業務内容、管理運営の実態、自然環境、資源の保全と開発利益のバランスという課題についてレクチャーを受けるとともに、活発な質疑応答も行うことができた。さらにその後、レンジャー同行のツアーを体験、訪問者にとって訪問先の価値を理解するために、インタープリテーションが如何に重要であるか、学生も実感できたと考える。

2番目の研修先、スミソニアン協会では、まず協会本部でその使命、目的と運営体制、施設概要を把握した後、グループ単位で自由に研修対象施設を選択し、日本の同様の施設と比較し

て各博物館の展示法や、来館者の様子を観察させた。2011年はワシントン DC の滞在期間が実質1日間と短く、膨大な展示内容の研修には不十分であったため、2012年は滞在日数を1日増やし、より多くの体験、研修が可能となるよう配慮した。なお、博物館が位置するモール地区は、週末の昼間、家族連れなど多くの人々が憩う、のどかな情景が見られるが、日没後は場所によって安全とは言えないところでもある。したがって、グループ単位で行動するよう指導するとともに、朝、昼、夕方の3回集合場所を指定して点呼をとり、また緊急連絡用のレンタル携帯電話をグループ毎に持たせたが、幸いそれを使用する状況は無かった。

最後の訪問先、ウォルトディズニーワールドリゾートでは、バックステージツアーに参加してテーマパーク裏側のしくみとスタッフの活動状況を視察、夢の仮想空間を如何に演出し、訪問客の満足感を獲得しているか、同行したディズニーのスタッフから詳しい解説を受けるとともに、都度の質疑応答を通じて、テーマパーク事業を支える実行体制の概要と、その基礎となる企業理念を学んだ。

3箇所の訪問地の内、研修前に学生が最も関心を持つのは、日本でも人気の高いディズニーの施設である。率直なところ、国立公園、博物館群という他の2箇所への事前期待度は相対的に低い。しかし、研修最初の訪問地「イエローストーン国立公園」で、雄大なスケールの自然の営みと野生生物に触れてその魅力に気付く。また、意図的にテレビ、電話が設置されていない宿泊施設、インターネット接続がほとんどできない環境の下で、人との直接交流、自然との関わりの面白さに目覚めていく状況は興味深い。

3. スミソニアン協会と博物館群

次の目的地ワシントン DC で研修参加学生は、「スミソニアン博物館群」各施設の展示内容が豊富で質の高いこと、誰にでも分かりやすく、興味が持てるように工夫され展示されていること、その結果、家族連れをはじめ、あらゆる年齢層の多数の人々が博物館を楽しみ、笑顔が溢れている情景に驚く。博物館とは知的欲求に応える面白い存在であり、多くの人々を惹きつける訪問対象として有効に機能している現状が強く印象に残ったと思う。多くの学生にとって、スミソニアン訪問前の博物館（Museum）のイメージは、貴重なものらしい素材が、意味が良く分からない難しい説明とともに陳列されているだけの、退屈な有料施設であったとすれば、事前予測を良い意味で裏切られたのであろう。

スミソニアン協会は、1846年に英国人科学者ジェームズ・スミソンが「知識の向上と普及」のため米国に寄付した資金で設立された、博物館群と付属研究機関である。現在ワシントン DC を中心に19の博物館、美術館、動物園などの施設を有し、2012年の訪問者数は3,000万人以上、年間予算は7.75億ドルで、米国連邦政府の資金を中心に、民間からの寄付と関連商品等販売収入で活動を行っている。因みに入場料はすべて無料である。スミソニアン協会の「ミッション」は、創設時から変わらず、「知識の向上と普及」を掲げ、活動目標たる「ビジョン」は「自らの伝統（Heritage）保全、新たな知識の発見、協会が保有する資源を、世界の人々と共有することによって、未来を築く」である。

一方、わが国博物館の目的は、博物館法の第1条に、「国民の教育、学術、文化の発展に寄
第4号（2013）



図2 ミソニアン博物館群の主要施設

与する」となっており、知の普及、共有と、将来への展望について具体的に意識した言及は見られない。こうした博物館の存在意義、ミッション、ビジョンに関する基本的意識の違いが、貴重な資源の価値を如何に多くの人に理解してもらうように伝えるかへの努力の差、博物館に人を誘う魅力の差の一因になっていると考える。

「レジャー白書2013」によれば、2012年のわが国余暇活動の中で、動物園、植物園、水族館、博物館の参加数は3,650万人と第7位である。この中で動物園、水族館などでは近年、行動展示など、米国と共通する発想で素材の魅力、価値を分かりやすく伝える努力を続け、訪問者数の結果に結びついているが、博物館はどうであろうか。

4. 研修の成果と今後の課題

ツーリズム発展のためには、素材の魅力／価値の引き出し方、それを他者に適切に伝えるコミュニケーション力が極めて重要である。この報告では、素材に違いはあれ、この点で一日の長がある米国3箇所の事例の中で、スミソニアン博物館を例に本研修の意義を述べた。わが国には優れた観光素材が多いと言われながら、その価値を磨き、それを他者に伝えて心を動かす力は未だ十分ではない。この弱みをどう克服するかが、日本の大きな課題である。将来を担うべき観光学部生が、この点に着目して研鑽を積み、人の心を動かす分野で活躍することを期待している。なお、本研修はツーリズムの多様性ゆえに、今後他の観点からの取りまとめも可能かつ有意義であり、来年以降の報告で取り上げられることを大いに歓迎したい。

本研修は短期間ではあるが、参加学生が米国の現場で、異文化理解とコミュニケーション力の重要性を実感し、またツーリズムの持続的発展に何が必要かについて自ら考え、今後の学びに繋ぐ、良い機会と考える。そのため、2013年以降も基本的に同じ内容で継続させるが、費用を抑えつつも研修内容の充実、安全の確保を図ることは、引き続きの課題である。



参考資料

「博物館法」 第一条（この法律の目的）.

「社会教育法」 第三条（国、および地方公共団体の任務）.

Smithsonian Institute, 2010 “Strategic Plan 2010-2015, Inspiring Generations through Knowledge and Discovery”, p.3-5

Smithsonian Institute, 2013 『スミソニアンへようこそ!』（案内、地図）

日本生産性本部, 2013 「レジャー白書2013」 第1章